

第一回留学報告書

留学決定に至るまでの経緯

根岸 優大

2025年6月20日

Funai Overseas Scholarship 2025 奨学生に採択いただきました、根岸優大と申します。私は、2025年3月に東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻の修士課程を修了し、同年秋より Imperial College London 工学部材料科学科の PhD に進学します。1年前の私は、PhD 留学について右も左も分からぬ状態だったと思います。そこから無事に第一志望の PhD プログラムへの進学が決まったのは、家族、友人、指導教員、そして FOS の選考委員の皆様と先輩方を含む多くの方々のご指導とご支援のおかげであり、この場を借りて深く感謝申し上げます。とりわけ FOS の先輩方の留学報告書は、出願準備や留學生活について具体的なイメージを持つ上で非常に参考になりました。今度は私が未来の留學生の皆様の一助となれるよう、本報告書では海外 PhD への出願と奨学金応募について、自身の経験を振り返ります。また、海外 PhD 留学はとても大きな決断であり、私がそうであったように、出願を迷っている方も多いと思います。そのような方の参考になるよう、私が海外 PhD を目指した動機についても書こうと思います。

目次

1	大学院出願について	2
1.1	志望校の決め方	2
1.2	教員とのコンタクト	3
1.3	出願書類	4
2	奨学金について	5
2.1	日本の奨学金	5
2.2	出願先大学院の奨学金	5
2.3	奨学金の併給	6
3	海外 PhD を目指した動機	6
3.1	何故 AI for Materials か	6
3.2	何故 PhD か	8
3.3	何故海外か	8
4	留学の抱負	9
5	おわりに	9

1 大学院出願について

私は、Imperial College London (ICL) の材料科学科と University College London (UCL) の化学科に出願し、両校から合格をいただくことができました。本章では、志望校を決める段階から、実際に出願するまでの流れを振り返ります。

1.1 志望校の決め方

志望校を決める指針はたくさんありますが、私は6月頃に、志望研究テーマに強い研究室をリストアップすることから始めました。私の研究分野である AI for Materials は歴史が浅く、かつコンピュータ科学と材料科学の境界領域に位置するため、この段階で既に候補は少なかったです。AI for Materials の中でも、私の志望テーマ（結晶の生成モデルとその解釈性・汎化性）に近い研究を精力的に行っている研究室がある大学は、15校程度でした。これらの大学は、優れた先行研究の著者や、学会・ワークショップで接点を持った研究者の所属を辿ることで調べました。次に、この15校を以下の観点から比較し、最終的な出願校を絞り込みました。

地域

- 関連分野に強い大学や企業が集積しているか

大学

- 博士後期課程のみのプログラムか
- 大学全体として、材料科学とコンピュータ科学の両分野で高い評価を得ているか
- 材料科学のバックグラウンドを持たない人も受験可能か（この条件で諦めた大学が何個かありました）
- スタートアップ輩出や共同研究を通して産業界と強く連携しているか
- 大学ランキングで一定以上の評価を得ているか

研究室

- 気候変動解決につながるマテリアルを扱っているか
- 学生数が少なく、綿密な指導が期待できるか（PhD で分野を変える人にとっては特に重要なはず）
- 平均卒業年数が長過ぎないか
- 論文の投稿頻度が高いか
- 実験系の研究室や企業との共同研究を行っているか
- 財政力があり研究費を取れているか
- 自身の望むキャリアパスを歩む卒業生がいるか
- コンピュータ科学のバックグラウンドを持つ私を必要としているか

指導教員

- 人柄が良いか
- 在学期間中に退官や異動の可能性が低い

研究室・指導教員の項目については、ウェブサイトだけでは把握しきれなかったため、研究室のメンバーや卒業生の連絡先を調べ、オンライン面談でお話を伺いました。そこで解消されなかった疑問点は、後述する志望教員との面談の際に質問し、最終的な判断材料としました。全ての項目を満たすプログラムを見つけるのは

困難でしたが、最終的に以下の4校に候補を絞り込み、志望順位を定めました。

1. Department of Materials, Faculty of Engineering, Imperial College London (ICL) / Prof. Aron Walsh
2. Department of Chemistry, Faculty of Mathematical and Physical Sciences, University College London (UCL) / Prof. Keith Butler
3. Interdisciplinary Graduate Programme AI-X, Nanyang Technological University (NTU) / Prof. Kedar Hippalgaonkar
4. Institute of Theoretical Informatics, Karlsruhe Institute of Technology (KIT) / Prof. Pascal Friederich

4校は少な過ぎるのではないかと思いましたが、一般に欧州の博士課程への応募では、北米と比較してより的を絞った出願が主流であると伺いました。各校の出願時期を考慮し、まずは締め切りが早いICLとUCL(10月~11月)の準備に注力することにしました。ICLとUCLについては、高額な学費(年間約600~650万円)と生活費が大きな課題でした。そのため、奨学金の獲得が進学の絶対条件となりました。そこで、出願先大学院が提供する留学生向け奨学金と、日本の財団等からの奨学金に複数応募しました(詳細は後述)。幸いにもFOSに採択いただいたことに加え、11月の時点でICLの指導教員から非公式の合格通知を受け取ることができたので、NTUとKITには出願しませんでした。

1.2 教員とのコンタクト

次に行ったのは、志望する指導教員へのコンタクトです。コンタクトのメールを作成するにあたり、私は以下の点を特に意識しました。幸いにも、全てのメールに対して返信をいただくことが出来ましたので、大きなミスはないと思います。

- メール構成：自己紹介と連絡の趣旨 → これまでの研究経験 → 博士で研究したいこと → ミーティングのお願い
- 教授が指定するフォーマットを守る(例えば、CVやcover letterの添付を求められることがある)
- 「博士で研究したいこと」の段落では、その研究室でないといけないことを伝えるために、志望研究テーマをその研究室の過去の論文と関連させて伝える

その後、教員との初回面談(約1時間)は、次のような流れで進めました。

- 自己紹介(1枚スライド)、アイスブレイク
- 研究したいことをスライドでプレゼン
- 指導形態などについて質問
- 今後のプロセス(出願、奨学金申請等)に関する相談と確認

指導教員からの事前指示は、「どんな研究に興味あるのか教えてね」程度でした。ですが心配性の私は、これまでの研究経験とPhDでの研究計画を伝えるスライドを作りこみ、想定質問への回答を準備し、たくさん練習して臨みました。この準備が功を奏し、面談直後には両校の教員から「奨学金申請と出願書類の作成を手伝うから是非来て欲しい。」という、非常に前向きな言葉をいただくことができました。後日談ですが、指導教員はこの時点で私の合格を決めていたと伺い、驚きました。受験者の合否を決めるのは学部や学科の

選考委員の役割だと思っていたのですが、私が受験した2校では、合格を決める権限の少ない割合を指導教員が握っているようです。実際、この初回面談で、本来出願後に行う選考面接は代替されてしまいました（つまり出願後に正式な面接はありませんでした）。この経験から、英国の博士課程に応募される方は、初回面談が事実上の選考面接となる可能性を念頭に置き、万全の準備で臨むことを強くおすすめします（もちろん、後述する出願書類は別途評価されるため、そちらの準備も重要です）。少し余談ですが、教員に投げかけた質問のうち好評だったものを1つ紹介します。それは、「退官・異動までの年数はどれくらいか？」という質問です。あなたの研究室でないとだめなのだという熱意が伝わりやすい質問だと思います。

1.3 出願書類

志望研究室の教員との面談が終わったら、いよいよ出願です。出願書類の準備は、振り返ると8月から始まっていました。というのも、奨学金の申請を8月に始めたのですが、その際に申請書類を書くことが、大学院出願の書類を書く練習になっていたからです。様々な奨学金に応募するにつれて、研究計画や志望理由は自然と洗練されていきました（もちろん個々へのチューニングは必要ですが）。9月末から11月にかけては、XPLANEのSoP執筆支援プログラムで、2名のメンターの方からCV・研究計画書・志望理由書の添削指導を受けました。実際にPhD合格を勝ち取った先輩方からアドバイスをいただく機会は大変貴重ですので、おすすめのプログラムです。以下、主要な提出書類ごとに、作成時に気を付けたことをまとめます。

CVは、これまでの学歴や研究経験、奨学金の受給歴などをまとめた書類です。当初、CVは経歴を箇条書きするだけと考えていましたが、SoP執筆支援メンターの方にCVは最重要書類であり作りこむべきだと教えていただきました。倍率の高いプログラムの選考委員や多忙な教員にとって、CVは志願者の能力を最も短時間で把握できる書類だからです。CVの書き方については様々な記事がありますが、私のおすすめは、第一志望の大学が公開しているガイドラインを参考にすることです。出願先ごとに別々のCVを書くのは大変なので、第一志望の大学に合わせて作成したものを他の出願先用としても使用しました。私が特に気を付けたのは、これまでの専攻とは異なる材料科学にPhDで取り組むための準備をしてきたことをちゃんと伝えることです。私は修士まではコンピュータ科学を専攻していましたが、博士からはAIで材料科学を加速するAI for Materialsを研究します。それに伴い、ICLとUCLについては、志望学科が化学・材料科学系となりました。当然、選考委員の視点で考えると、これまでコンピュータ科学を専攻していた私がいきなり材料科学の研究をすることは難しいと思うはずですが、その懸念を払拭するために、研究経験の欄では、AI for Materialsの研究をインターン等で行ってきたことを明記しました。AIの基礎研究についても、実験データとして化学や物理のデータを使用した場合は、そのことを明示しました。CVに限らず、出願書類の読み手が誰なのかを意識して書くことは常に大切にしました。実際に提出したCVとほぼ同じものをこちらで公開しているので、よろしければ参考にしてください（随時最新の情報に更新していますが、フォーマットは出願時からほとんど変えていません）。

研究計画書（Research Proposal）は、通常1~2ページほどでPhDでの研究プランを説明する書類です。大学院側が書くべきことをプログラムのホームページで指定していたので、それを満たすように書きました。他に意識したのは、選考委員がコンピュータ科学か材料科学のどちらか一方にしか精通していない可能性があるため、難しすぎる専門用語は避けることと、図を添えて視覚的にわかりやすくすることです。研究計画書は、分野の動向を正しく捉えられているか、PhDで3~4年かけて取り組むのに適切なテーマか、などを軸に評価されるはずですが、これらの点を、修士学生（しかもPhDから分野を変更する）の私が独力で見極めるのは難しかったので、志望する指導教員やインターン先で出会った研究者の方などに、内容のアドバイスをいただきました。さらに志望する指導教員には、提出前に最終的な添削をしていただきました。

推薦状は、学部・修士の指導教員、オーストラリアに留学した際の指導教員、研究インターン先でのメンター（3枚目が必要な場合のみ）に推薦状を書いて頂きました。その際に重視したのは、各推薦人に自身の異なる側面を褒めてもらうようにすることです。折角複数の推薦者に推薦してもらうわけですから、内容は出来るだけ異なる方が情報量が増えて望ましいです。もっとも伝えたい強みは複数の推薦者に褒めてもらうようにつつ、補助的な強みは各推薦者に割り振りました。例えば私の場合は、新しい分野をすぐに学ぶ吸収能力の高さや PDCA サイクルの早さは全推薦者に書いて頂きましたが（PhD で分野を変えても大丈夫であると伝えなかった）、英語能力やコードの実装力は一人の推薦者だけに書いて頂きました。

志望理由書（Statement of Purpose）については、すでに紹介した XPLANE の SoP 執筆支援プログラムがとてもおすすめです。メンターの方と上手くマッチングが出来なかった場合も、SoP の執筆方法を学べる教材と動画講義を見れたり、SoP を 1 度だけ添削してくれたりします（年度によって支援内容が変わる可能性があります）。このプログラム以上に私がアドバイスできることは特にありません。

前述の通り選考面接は教員との初回面談で代替されてしまったので、これらの出願書類を提出後は合格通知をいただくまで特にすることはありませんでした。

2 奨学金について

他の欧州諸国とは異なり、英国の PhD は給料を貰えないことが多いです。そのため、TA やアルバイトをしたり、奨学金を受給したりする必要があります。私は、できるだけ多くの時間を研究に使いたいと思い、奨学金獲得を目標にしました。日本の財団等からの奨学金と、志望先大学院の奨学金の二種類に応募しました。

2.1 日本の奨学金

日本では、海外 PhD 向けの奨学金が実はたくさんあります。これは国際的に見ても恵まれた環境です。インドネシア人の友人は「国からの奨学金（倍率約 1000 倍！）以外ほぼ選択肢がない」と言っていました。これと比較すれば、日本ではどんなに倍率が高くても数十倍ですし、種類も豊富です。たくさん応募すれば、奨学金を取れる可能性は十分にあると思います。自身に合った奨学金を探すには、XPLANE 海外大学院向け奨学金データベース、東京大学奨学金情報、JASSO 留学のための奨学金などのサイトが有用でした。これらのサイトを参考にして、私は、Funai Overseas Scholarship（合格）、KDDI 財団日本人留学助成（補欠 → 不合格）、リクルートスカラシップ（書類不合格）、JASSO 海外留学支援大学院学位取得型特別枠（面接不合格）に応募しました。応募数が少ないのは、選考期間中に海外に滞在しており、日本での対面面接があるものは諦めたからです。国内にいる方は、ぜひ私よりも多く応募してチャンスを広げてください。あまり結果が振るわなかった一番の理由は、応募書類の添削を周囲の方にお願いしなかったからだだと思います。「忙しい人に頼むのは申し訳ない」と躊躇してしまったのですが、結局、大学院の出願書類は多くの方に添削していただきました。奨学金の段階から、もっと積極的に周りを頼るべきだったと思います。

2.2 出願先大学院の奨学金

日本の財団等が提供する奨学金に比べ、大学院が独自に設けている奨学金制度は、情報が少なく見過ごされがちだと思います。「大学院が直接渡す奨学金なんてあるの？」と思う方もいるかもしれませんが、私が応募した ICL と UCL は、多様な奨学金を用意していました。例えば ICL の場合、243 もの奨学金が存在し、full-time の PhD 留学生向けのものに絞っても 43 種あります。その 1 つである President's PhD Scholarship

に応募し、幸いにも採択されるに至りました。UCLについても、同様の Research Excellence Scholarship に応募しましたが、ICL への進学を決めた時点で辞退しました。

出願先大学院の奨学金の特性と応募戦略について、少し詳しく説明します。前述の通り、ICL には full-time の PhD 留学生向けの奨学金が 43 種類ありますが、その多くは特定の研究分野の学生向け、または特定の属性を持つ学生向け（国籍や性別に制限がある）です。一般に、こうした応募要件が限定的な奨学金は、誰でも応募可能なものに比べて競争率が低い傾向にあると思います。まずは、そのような奨学金のうち申請できるものを徹底的に探すことをおすすめします（私自身は残念ながら合致するものを見つけられず、PhD 留学生全員が応募可能な奨学金にしか出せませんでした）。また、奨学金には full-cover と partial-cover の 2 種類があります。full-cover では授業料に加えて生活費や研究費が支給されますが、partial-cover ではこれらの費用の一部のみが支給されます。一般に、full-cover の方が倍率が高くなるので、できれば partial-cover のものも同時に申請すると良いと思います。partial-cover の場合は、大学が提供する他の partial-cover の奨学金と併給が認められる場合が多いので、応募要件を満たしているものは片っ端から応募するのがおすすめです。出願先大学院の奨学金についてもっと詳しく知りたい方は、こちらで詳しく書いたので、ご覧ください。

2.3 奨学金の併給

最終的に私は、FOS と President's PhD Scholarship の 2 つに採択いただきました。President's PhD Scholarship は授業料を全額免除してくれるものの、支給される生活費は高騰するロンドンでの生活費を支えるには心許なく、また、保険料のカバー等もありません。そこで、FOS の先生方に相談したところ、生活費の不足分と保険料を FOS からご支援いただけることになりました（なお、ICL 側にも、外部奨学金との併給に問題がないことは事前に確認済みです）。このように、個別の事情を汲んで前例のない形でご支援を決定してくださった FOS の先生方には、心より感謝申し上げます。この手厚いご支援のおかげで、金銭的な不安なく、研究に専念できる環境を整えることができました。

3 海外 PhD を目指した動機

ここまで、今後海外 PhD と奨学金に出願される方に向けて、私の経験を書きました。本章では、まだ海外 PhD を目指すかどうか決めかねている方の参考になることを願って、私が海外 PhD を目指した動機について書きます。PhD は、通常 3 年以上かかるプログラムです。人生の短くない時間を使うので、進学の決断は簡単ではありません。また、学部・修士への進学の際とは異なり、周囲の多数派とは異なる道に進む（海外となればなおさら）のは勇気がいることです。これまで割と成り行きに身を任せて生きてきた私にとって、海外 PhD 進学の決断は大変でした。今になって考えるともう少し気楽に決めても良かったかなと思いますが、今後の生き方について深く考える良い機会になりました。

3.1 何故 AI for Materials か

私が出願を決めた理由をお話するには、何故 AI for Materials に興味を持ち専攻を変更したのかから説明しなくてはなりません。多くの方は関心がない分野かと思いますが、今ホットな分野ですので、少しだけお付き合いください。

私は修士課程までコンピュータ科学を専攻し、人工知能の基礎研究を行ってきました。この専攻と研究分野を選んだのには 2 つ理由があります。1 つは、単純に楽しそうだったからです。大学の前期教養課程でコン

コンピュータの面白さとプログラミングの楽しさを知り、情報科学科に進学しました。進学後、学科の授業やオンラインコースを通して人工知能技術に惹かれ、人工知能の理論研究を行う研究室に進みました。もう1つの理由は、コンピュータ科学の専門性を身に付ければ職には困らず、高給取りになれるだろうという打算的な予測があったからです。外資系企業やメガベンチャーの(AI)エンジニアの給料は他の職種より高いことが多く、AI×〇〇のスタートアップも増えています。実際、学部生の時点では、楽しさと給料の高さを理由に、AIエンジニアあるいはAI×〇〇の起業家になろうと考えていました。

しかし修士になって、(少なくとも私は)興味とそれに基づく楽しさを理由にキャリアを選ぶべきではないのではないかと考え始めました。というのも、私は飽きっぽい性格なので、ある興味に基づく楽しさは長続きしないと思ったのです。むしろ、何か大いなる目標や大義を達成するために生きようと思いました。その場合、自身の仕事の意義を常に感じることができず、そういう仕事もまた別の意味で楽しいはずで、さらに、最終的に目標を達成した際には、大きな喜びが待っているでしょう。高給取りであることに越したことはありませんが、私の中での優先順位は、目標・大義 > 給料になりました。

では、人生をかけるほどに重要な大義とは何でしょうか?しばらく悩んだ末に、気候変動の解決に取り組みたいと思うようになりました(最終的に決めたのは、修士1年の冬くらいだと思います)。日本で生活する分には、夏の暑さが年々厳しくなっているくらいしか気候変動の影響を感じることは無いかもしれませんが、様々な資料を読むうちに、問題の大きさを実感しました。気候変動は自然環境の破壊だけでなく、災害や健康被害を引き起こし、その影響は現状の格差を広げる形で表れます。世界全体で取り組むべき課題であり、一過性の問題ではないため、人生をかける大義としてぴったりだと思いました。また、当初は自分ごとにできていませんでしたが、2024年にオーストリアに留学した際に、気候変動解決に取り組みたいという気持ちが強まるきっかけが2つありました。1つ目はオーストリアのハルシュタットという町でハイキングをした際に氷河が年々減少している様子を目の当たりにしたこと、2つ目はベネチアのサンマルコ広場を訪れた際に広場の水没を経験したことです。美しい自然や文化遺産が気候変動の負の影響を受けている現場を体験し、解決に貢献したいという気持ちが強まりました。

次に私が考えたのは、どうやって気候変動の解決に貢献するかです。それまで自身が学んできた人工知能以気候変動の解決に貢献する方法を模索しました。そこで、1つの論文に出会いました。それが、“Tackling Climate Change with Machine Learning”です。この111ページにも及ぶ論文は、気候変動の解決のために人工知能技術を応用する具体的な方法について、網羅的に議論しています。あまたの応用先のうち、私は、人工知能による材料科学の加速(AI for Materials)に興味を持ちました。1つ目の理由は、AI for Materialsが多くの応用先で重要であるからです。所望の性質を持つ優れた材料の開発を促進することは、化学反応における触媒・EVのバッテリー・二酸化炭素の吸着材などの設計につながります。様々な応用先を支える根本技術の開発を行いたいと思いました。2つ目の理由は、既に産業界における社会実装規模の勝負となっている他の応用先(自然や農地の遠隔監視、電力の需給予測など)とは異なり、現在は技術的ブレイクスルーを待っているからです。AI for Materialsは、長期的に見て気候変動の解決に大きく寄与すると期待される一方で、まだ若い分野で技術的制約から産業界に浸透していません。論文内では、AI for Materialsが気候変動解決に最も寄与するのは2040年以降と予測されており(私はもっと早いと思いますが)、今からこの分野に飛び込んでも十分に私が貢献する余地はあると判断しました。

3.2 何故 PhD か

次に、AI for Materials に取り組む様々なキャリアの中から、PhD 進学を選んだ理由についてお話しします。まずは、先述の通り AI for Materials は、技術的困難さが理由で積極的に産業利用されるレベルに達していないからです。現状この分野を牽引しているのは、アカデミアと巨大テック企業の研究チーム、および産業応用の初期段階を担うスタートアップです。まだ研究の役割が大きいと、私も研究に携わり、技術的ブレイクスルーに貢献しようと思いました。しかし、いきなり企業の AI for Materials の研究チームに就職するに見合う専門性を私は持ち合わせていません。そこで、博士課程でコンピュータ科学と材料科学の両方の専門性を身に付けることを目指すことにしました。卒業後は、研究から社会実装への転換が進んでいるはずなので、最もインパクトのある社会実装を行える道を選ぶつもりです。

AI for Materials に限らない一般的な視点でも、PhD に進むメリットはたくさんあると思います。専門性と博士号という学位が得られることに加えて、PhD では多岐にわたる能力が身に着きます。例えば、複数のプロジェクトを同時に動かす能力、成果を相手に伝える能力、周囲を巻き込む能力などが挙げられるでしょう。これらの能力は、社会で働く上でも大事なはずで、別に、博士課程に行ったから必ず将来研究者として生きなくては行けない訳ではありません。新卒 3~4 年と比較して、PhD で得られるものの方が多いと感じるなら、PhD 進学は合理的な判断だと思います。

3.3 何故海外か

日本ではなく海外での PhD を志望したのにも、いくつか理由があります。まず何より、ワクワクするからです。正直これだけあれば十分かもしれません。小さい頃から、海外留学や海外での仕事に憧れてきました。パンデミックで一時は海外挑戦の道が閉ざされてしまいましたが、PhD 進学のタイミングで再び挑戦しようという気持ちになりました。単純な理由ですが、小さい頃からの憧れは、私にとって大事な動機です。

もうひとつ重要な理由は、志望研究テーマに強い研究室が、日本より海外にあったからです。これは、私に限らず多くの方に当てはまると思います。なぜならば、日本の大学数(約 800 校)は、世界全体(約 23000 校)の 3.4% しか占めていないからです。THE 世界大学ランキング上位 100 校あるいは 1000 校に絞ると、日本の大学は約 2% です。つまり、志望研究テーマに一番合致する研究室を探すと単純に海外にある確率が高くなると思います。

また、私はこれまでの研究留学を通して、海外での研究生生活の方が自身に合っていると感じました。まず、日本での研究室に比べて、指導教員や他の学生と議論を行うことが多かったです。定期的な MTG だけでなく、休憩中に悩みやアイデアを軽く議論する文化があり素敵だと思いました。また、フレンドリーで外向的な方が多く、どちらかという内向的な私にとっては良い人間関係を築きやすい環境な気がします。もちろん、このあたりの話は国や研究室に大きく依存し一般化できるものではないですが、多少なりともこのような傾向がある気がします。

さらに、海外の方が、社会が博士学生に対して寛容であることも理由です。日本では、学部あるいは修士からの就職が一般的であり、博士は「変わり者」という風に見られることが多い気がします。博士人材を求める企業もありますが、国の支援は十分でなく、実際博士取得者数は年々減少しています。これは、博士取得者が増加する米英独中韓などの国とは対照的です。世間一般の意識も、国の支援や企業の採用も、海外の方が博士学生に優しいと感じます。

4 留学の抱負

最後に、これまで私を支えてくださった皆様への決意表明として、そして留学生活で困難に直面した際の自らの拠り所として、留学の抱負を書こうと思います。

第一に、自らが研究をする理由を忘れずにいるようにします。私が研究をするのは、材料設計・探索の AI による加速を通じて、気候変動の解決に貢献したいからです。常に社会貢献の意識を持って研究することは、母校・東京大学の標語「志ある卓越」から学んだ姿勢であり、これから進学する ICL のミッション “achieve enduring excellence in research and education in science, engineering, medicine and business for the benefit of society” にも通じます。研究が上手くいかずに苦しい時もあると思いますが、そういう時こそ、この原点に立ち返りたいと思います。

第二に、常に内省の姿勢を持ち、自己変革の機会を求め続けるようにします。これまでの留学を振り返ると、自身の考え方・生き方を見つめ直す機会がとても多かったです。これは、全く異なる人生観・価値観・文化背景を持つ人との出会いに刺激されて、当たり前と思っていたことが相対化された結果だと思っています。こういう出会いは、ときにある種の不快感・ストレスを伴います。私にとっては、同じ考えの人と過ごす方が楽で心地よいです。でも、そのストレスから逃げずに、むしろそのストレスを楽しんで内省のきっかけとすることで、大きな成長につながると 생각합니다。この姿勢を忘れずに、世界的にも有数の多様性に富むロンドンでの留学を、実りあるものにできるよう頑張ります。

5 おわりに

長文となりましたが、最後までお読みいただき、ありがとうございました。私は、誰もが海外 PhD に挑戦すべきだとは思いません。それよりも、自身がどう生きたいのかをしっかりと考えて選択することが大事だと思います。この点は、SoP 支援プログラムで私のメンターだった Hiromi さんが、こちらの体験記の最後の章で素晴らしい文章でまとめてくださっています。将来の道を悩んでいる方に、また海外 PhD 挑戦を決めた方に、私の事例が少しでも参考になれば嬉しいです。



図1 サウジアラビアでの研究留学中、ICL から正式な合格通知を受け取った直後の夕暮れ